昭和十四年十二月

會報

Ⅶ

京都帝國大學文學部
地理學談話會

一、談話會報告

例會

○昭和十四年一月二十八日（土）午後二時半

一、中央アジア及極東に於る定期航空路　二田生　川上喜代四

一、マニオーラ　野間三郎

出席者　十五名

○昭和十四年二月十日（金）午後三時

卒業論文の梗概を聞く、柴田君發熱の爲缺席。

一、北支那に於る氣候的災害に就て　淺井辰郎

一、十州塩田稼業の地理學的考察　内藤玄匡

出席者　十五名

○昭和十四年六月十七日（土）午後二時半

一、武藏國見沼代用水の研究　柴田孝夫

一、沖縄の樣相　長谷部健史

出席者　二十四名

第七回地理學談話會大會

京大倶樂部並各科聯合講演會が十一月三日より五日にわたり例年の如く行はれ、地理學談話會も第七回大會を十一月四日午後五時半より文學部第八教室にて行ふた。當日は平日でもあり且つ午後遅く開會といふことになつたが、他部會との振合もあり止むを得ぬ次第であつた。而も雨さへ加へたに拘らず多數会員と共に會員外參会者合して六十名を超へる盛況であつたのは何よりであつた。

當日は午後一時より樂友會館にて史學研究會大會あり、小牧教授は「興亜地政學」なる講演を行はれた為午餐會を行ふことも出來ず、晩餐會を行ふことこれ又不能の為講演途中にて約十五分間休憩を宣して茶話會とした。充分懇談の暇なく遺憾の會員諸氏には誠に申訳なき比しさであつた。

演題

一、開會之辞　室賀講師

一、分布的觀察の性質　中江　健

一、伊豫路雜感　野澤　浩

心、地理學の実踐性　松井武敏

一、北支蒙疆旅行談（幻燈使用）　水倉二郎

一、満洲國の民族　島　之夫

一、先志摩に於る二三の問題　龍本貞一

こゝにて休憩、茶菓を出す

一、長崎縣に於る家舟的聚落　吉田敬市

一、交通地理から見た本陣　和田篤憲

講演者多數の爲一人約十五分宛であつた。

出席者芳名を記してをく

中野竹四郎、田中秀作、蒜田元春、小牧実繁、田中博、松下有雄、岩根保重、島之夫、籠本貞一、米倉二郎、海老原治三郎、織田武雄、別枝萬彦、渡辺茂藏、野澤浩、松井武敏、室賀信夫、今村新太郎、朝永陽二郎、村山方治、渡辺久雄、小藤田亮、御子柴幸一、川崎健史、木村寛治、野間三郎、杉村正治郎、中江健、淺井辰郎、柴田孝夫、内藤玄匡、吉田敬市、和田萬憲、川上喜代四、三上正利、岡本信太郎、中田榮一、西田和夫、藤野義明、（以下一回生）阿部正道、池田光二、河野通博、戸川俊正、曽田紀一郎、植村元覺

以上四十五名の他一般來會者十五名

講演要旨　（未提出の分は乍遺憾掲出を見合せた）

一、楊子江の船　蒜田元春

一、山西省の開発　田中秀作

一、開會之辭　小牧教授

開會したのは既に九時五十五分。次に

○伊豫路雜感

野澤　浩

「天災と農事」の古來我が國社会に於ける最大関心事の一たることは茲に贅言を要しない。從つて之が對策として直接的には水利の整備が行はれ、間接的には救恤法とか田制上の慣行（伊豫では藩政時代には地坪慣行とか圃持など）が行はれ、又農民は相集つて神佛に祈願をこめてゐた。伊豫では風土の関係上、比較的旱害の多い東・中豫地方と風水害の多い南豫地とではその對策の上に多少の相違点を見出すことが出來る。即ち東中豫地方では積極的に人間技術の上に依存する傾向が漸次濃厚になつたことは溜池の分布からも想像に難くない。之に反して南豫地方では今に神佛の加護に依存する傾向が強い様に思はれる。茲ではかつる地方民性の相違点の一として南豫地方に廣く分布せる「神明社と伊勢踊」の問題を取上げることにする。

南豫地方二七一ヶ町村中殆ど神明社をもたぬものがない。村民は神明社を「お伊勢山」と呼び、祭神天照大神を「お天日様」と尊稱し、天災に對しては常に祈晴・祈雨祭を行ひ、その神事には常に伊勢踊を伴ふ事を特色としてゐる。伊勢踊は土佐から伊豫路に入つたものゝ如く、旧宇和島藩と旧大洲藩の境、鳥坂峠以北

にはその分布を見ない。素朴な南瑠の農村にかゝる信仰が深く根ざしてゐる事はその踊が蒙古軍襲來にかゝる國難克服と期を一にしてをり、然もそれがこの地方の民間行事の重要地位を占むることは國民精神總動員の叫ばれる今日再檢討の必要があると思ふ。

○地理學の實踐性

松井武敏

現在地理學は其の實踐性を要求されてゐるが　地理學は實踐に對し其の無力性を示しつゝある。併し元來地理學は實踐的性格を有してゐる。此の事は歴史的に實証し、理論的に解明し得られる。然るに地理學が其の實踐性を喪失したかの觀ありて、地理學に危機の感ぜらるゝ所以のものは地理學研究に何等かの缺陥の存するに依る。即ち地理學研究の本質に關し諸説あれども何れも夫々矛盾を包藏するに基く。然れば地理學の實踐性の獲得には此等の矛盾を顕はにし、諸對立殊に地誌的と通論的との對立を止揚するを要す。而して此が止揚には事實と法則との弁証法的構造に十分なる自覺をもたねばならぬ。此れ各人が方法的理解を要請する所以である。更に此所にいふ實踐性とは人類の理想實現に當りて現實に存する矛盾と調和とを顕はにして之を改革せんとするの要求である。

されば地理學に於て現在世界に存する自然と人文との関係の矛盾と調和とを、人類が実現せんとする理想を前提として明確ならしめ、以て人類発展の諸條件を追及する事こそ地理學が実践性を獲得し得る道である。此れ吾人が実践への熱意を促さんとする所以である。斯くて地理學の実践性は方法的自覚と実践への熱意によって克ち得らる。

○北支蒙疆旅行談（幻燈使用）　米倉二郎

旅行コース。昭和十四年八月十二日奉山線にて北京着――京漢線にて石家莊――正太線にて太原――同蒲線にて大同――京包線にて厚和、包頭――京包線にて北京――飛行機にて濟南――膠濟線にて青島。九月一日出帆帰國。

今夏北支の洪水、空中よりの大觀、京漢、奉山沿線の觀察の結果と一九二四年大水害地域（マロリー・ランド・オブ・ファミン所載）中國水利問題所載水害地図とを綜合して今夏北支の洪水地域を想定図示す。河北省の三分の一、我が九州に匹敵する廣範囲に亘るものである。

幻燈

一、北京正陽門　二、北京東城隆福寺胡同　三、定縣附近の洪水　四、仝　五、正太沿

線陽泉附近、炭坑地帯　六、正太沿線　七、仝　八、太原城南門　九、太原橋頭街　十、太原新民公園　十一、太原北郊　太原電氣廠　十二、山西盆地黄土層地帯の景觀　十三、所口鎮、十四、軒崗鎮附近　十五、大同市街　十六、雲崗石佛　十七、石佛寺附近大觀　十八、大同炭坑　十九、陰山山脈　二十、朔北草原の放牧　二十一、濟南大明湖

○滿洲國の民族

島之夫

「五族協和の王道樂土」と稱する場合の五族とは、日・鮮・漢・滿・蒙の五族を指す樣である。これは支那の漢・滿・蒙・回・藏といふ言葉に合して考へたもので、滿洲國には五族の外にロンヤ人・ユダヤ人等の外國人もあり、オロチョン・ゴルヂ・ソロン等の土人も居る。

日・鮮といふ區別は適當でない。内地人・朝鮮人ならよいが日・鮮と區分すると鮮人は日本人でないといふことになる。それで近頃は五族協和といふ代りに民族協和といふ字を以て代へてゐる。

最近の滿洲國人口は三千八百有余万、その九割は漢族である。滿族は東部滿洲に多く、約八十万であるが、漢滿の區別は事実上頗る困難である。蒙族は西部

滿洲に住みこれも約八十万。内地人は南滿の都會地のものと北滿の農業開拓地のものとあり總數は五十万。朝鮮人は間島省を主として約百万。ロシア人はハルピン附近とハイラル附近に多く合せて約六万。オロチョンは興安嶺の山間に、ゴルヂは松花江の下流地方に、ソロンは興安嶺方面に分布する。

○長崎縣の家舟的聚落

吉田敬市

九州沿岸より瀬戸内、南海道方面の海岸には特殊な水上生活者の聚落が各所に見られる。殊に長崎縣西彼杵半島西岸の瀬戸、崎戸は古來純水上生活者の根據地にして興味ある生活樣式を示してゐる。即ち之は小舟をその家とする所謂家舟生活にして陸上に全く居住せず、漁業を專業とする原始的生活であつたが、近時陸上に家を建てゐるもの多く現在六十八世帶に及び純家舟生活者は三十五世帶に減少してゐる。漁業は季節的に集團移動するものと年中個々に行ふものとに分けられる。前者は五島對島方面に迄移動進出し、主に網又は鈎りによるが、後者は主に鮮を以て沿岸の水底に潛行し、魚類アワビ等を採取する。かく漁業專業にして資本主義的色彩を全く欠く彼等の産業機構は、未だ原始漁業の域を脱せず、從つて生活文化が稍々遲れてゐるのは遺憾である。

家舟発生の沿革は未だ明でない。恐らく支那、朝鮮外来民族の名殘か、さなくば原住民族の化石的存在かと考へられる。文明六年大村純伊が有馬氏との合戦に敗戰潛逃する際、彼等は純伊をかばつて彼杵、松浦の諸沿岸を来往したゝめ、爾来大村氏の庇護を受けてゐた事は彼等の宝藏する家船由緒書並に家船の由来といふ古文書の中に明瞭であり、又大村候の郷村記の中にもその記迹がある。かゝる特殊聚落が西國、南海沿岸に多く遺存する事は地理學的に興味を覺ゆる問題である。と同時にこの方面の研究は諸種の点より見て意義深きものである。

○交通地理から見た本陣

和田篤憲

一体人が移動交通する場合に、地理的條件に制約せられる處が大であるといはれてゐるが、地理的特性は交通的特性と相伴ふものである。交通地理ではこの両者の関係を研究するものとされてゐる。この地理的條件がもつ意義の重要性は、時代の移り変りや交通機関の変化により、交通の中心地が変遷することによつて変つてくるのである。私は地理的制約を蒙ることが尚大であつた封建時代の道路と其路上の交通施設であつた本陣をとつて、この頃に於ける街道交通の特異性を述べてみたいと思ふのである。即ちこの島に用意した道路と本陣は、

京阪神の通路中西國街道筋にあつた。そしてこれを説明する為に路上を通行する西國大名をとつた。

この大名がどうして江戸へ行つたか。幕府にとつて心配の種子となつてゐた勢力の二つの中心、即ち大阪と京とを如何に彼等は避けなければならなかつたか。自然と人事とが織りなす封建時代の絵巻物の一つとして、私は一つの道路、一つの水陸に、路上の通行者西國大名を配して、近世に於る地理的特性と交通的特性との關係をみる為の一つの試みとした。

○山西省の開發　　田中秀作

東亜に於る典型的高原地形を有する山西省を主として氣温、雨量と農作物分布とによりて北中南の三つの經済地理區に分ち、其の各に就き經済的特性を述べ、次に本省の地理的位置と地形に基く隔絶性孤立性を利用して地方政権閻錫山が所謂山西モンロー主義を稱へ、保境安民造産救國を標語として鋭意經済的開発を図つた省政建設十年計画の説明と、各産業特に工業の建設を重工業、紡織業、製粉業、醸造業、製紙業、窯業の各部門に分ちて解説し、以上を經済地理學地政學の見地より批判し、本省の鑛産資源がその量に於て優るも種類に乏しきこ

と、動植物資源に於て南北性の差異少き缺点を擧げ更に孤立主義閉鎖主義の時勢に反するを指摘し、將來の合理的開発に言及した。

二、教室より

昭和十四年度講義題目

			一週時間
普通	地理學通論（第一部）	小牧教授	二
	地理學通論（第二部）	野満教授	二
特殊	二十世紀の探檢（前學年の續き）	小牧教授	二
	地因學特論（前學年の續き）	小野講師	（二〇）
	政治地理	室賀講師	二
	聚落の歴史地理學的研究	米倉講師	（二〇）
演習	地理學の諸問題	小牧教授	二
副科目			
講義	Hettner, A.; Grundzüge der Länderkunde: Aussereuropäische Erdteile.	小野講師	（二〇）

Robequain, Ch.; L'Indochine francaise.　　室賀講師　一

人類學概説　　金関講師　（三〇）

大正十四年以來昔通講義第二部を担当下された理學部中村新太郎教授は今回健康を害された爲授業擔当を辞され、地球物理學野満教授をその後に迎へることになった。同教授の講義十一月十五日より開始。

永年御指導を賜った中村教授に深く謝意を表する。

○壮餞會

昭和十三年度卒業生三名を送る壮餞会は二月十日午後六時より樂友会館にて開催。簡單な料理の会食と記念撮影を行ふたが、小牧教授の訓辞、卒業生淺井君の謝辞、二回生川上君の別辞など和かな雰囲氣の内に行はれた。

○謝恩會

口頭試問終了後の三月十七日卒業生、小牧教授、藤田前講師、室賀講師を招いて謝恩の宴を北白川新白系に張る。

○歓迎會

四月二十八日午後六時半仙樂園にて二回生歓迎会を行ふ、当日小牧教授藤田教

授を始とし會するもの二十一名。　來會の一回生も三名を算した。会費二円五十錢。

○二回生春季旅行

小牧教授、室賀講師野間助手及び二回生四名、六月五日出発。綾部、舞鶴、橋立、峰山、久美浜、城崎の径路をとる。郷村、宿石浜　及び玄武洞は視察地の主要なるものであつた。七日京都歸着。

○二回生秋季旅行

本年度秋季実習旅行は、日程四日、小牧教授・木村副手を指導教官とし、二回生中田・西田の参加により飛騨白川郷研究を目的として行はれたり。同僚岡本・藤野の両君が病氣事故の為、参加せられざりしは甚だ殘念なりき。

十月十日朝京都を出発。岐阜にては高山線と連絡の時間を利用して全市の一角を見學せり。高山線では各務ヶ原飛行場・犬山城・日本ラインを交々遠近に眺む。美濃太田より越美南線・白城線(バス)を経て、夕刻牧戸に到る。

第二日、早朝旅館の窓より向ひの山を眺むれば、半ば紅葉せるその山々に霧のかゝりて秋氣清し。八時バスにて愈々目的地白川郷に向ひ、八時四十四分頃全郷に入る。

御母衣にてバスを捨て、直ちに遠山大家族家を見学す。百余年を経たりといふ、その古き歴史を今に傳へる如く、全家内部の構造合掌造の釘一本すら用ひず、煤や煙にてくゆらされたる此処彼処の縄は漆黒の鎖なり。側面より見れば五階建なれど、今は一階にのみ人の住みて（現家族は戸長以下十六人）、他は養蚕室、乾燥場などに使用されてあり。屋根は茅葺その面の水平線と成す角は約六十度なり。此の急傾斜は冬季に積雪を落ち易くする為のものだとは一行の意見の一致した所である。徒歩にて北に進む。この辺の人々の服装に認められる特色は「ダッツケ」と稱する猟袴である。然し之は「モンペ」の如く北陸地方の雪國或は東北地方の山國に於て用ひられる服装によく似てゐる、とは島之夫氏の所説である（地理教育廿貳巻参照）。

稗田を会めて以北は、未だ電燈なく今猶石油ランプを用ひあり。夕闇迫りきて、その暗りの中を荻町に到る。

今十月十一日は當地秋祭の前々日に當る。宿の近くで女子青年團の人々の古き踊りを稽古してさゞめきあへるあり。望みてその古き踊りの数々を宿の向ひの家の燈ぶちにて、石油ランプの下見るを得たり。誠に幸なりき。

明くれば第三日。雨。學校へ通ふ子等すべて「ゴザブシ」とて、「ゴザ」を巧に組合せたるを着けて行く。もし雨なかりせば知るを得ざりしものを誠に幸多きかなと一同喜びあへり。雨をついて先を急ぐ。椿原で偶々中食に休ませて貰つた家が、島氏の記述にもある「天地根元宮造」風の草葺小屋ある大宅氏宅だつた。もとは便所に造られしも今は物置小屋とせられたり。小白川にて白川村を終る。この頃より雨上り庄川の流れは愈々廣し。夕刻西赤尾に入る。

第四日はバス故障の爲下梨までトラック、後徒歩にて祖山至由大牧溫泉へ。実に強行軍だつたが、大牧溫泉に入つたお蔭で疲れが大変休まつた。夕刻の庄川を小牧まで舟にて下る。バスにて青島町へ。福野・高岡を経て午後九時二十二分富山に入る。

右にて無事全行程を終つたのであるが翌日は更に黒部峡谷を尋ぬ。全日夕刻小牧教授は京都へ、其翌日水村副手は更に高山方面へ研究の旅に向はれたのである。

以上

西田記

○大學院入學

本年左記の五氏大學院入學を許可された

四月廿七日　織田武雄　交通地理學　指導教官　小牧教授

〃　柴田孝夫　日本の歴史地理　小牧教授

〃　内藤玄匡　東亜の地理學的研究　西田教授

〃　和田篤憲　近世交通史並に交通地理　小牧教授

五月十八日　淺井辰郎　氣候の地形學的研究　那波教授

〃　〃　〃　〃　小牧教授

〃　〃　〃　〃　滑川助教授

○三回生卒業論文題目

一、航空輸送の地理學的研究　川上喜代四

一、清時代の支那地図　――概觀と諸問題　三上正利

一、庄川平野の開拓　林宏

一、南洋華僑に就て　都子屋

○地理論叢に就て

地理論叢第十輯は猶発刊の予定に遅れたが九月には出版する迄得ました。

第十輯を以て一先づ止め將來機を見て又刊行を継続するといふ如き模様もあり

ましたが、古今書院が依然刊行を引受けることになり、第十一輯以下続々出版の手筈になり、差當り第十一輯を昭和十五年四月に、第十二輯を今年末に出すつもりでをります。

就ては會員諸氏より多数玉稿頂戴し刊行に遅滞なからしめたいと存じますので、隨時小牧教授の手許へ玉稿御投與被下度こゝに御依頼申上る次第。

會員消息

○小川琢治先生は本年五月二十八日を以て古稀の齢を迎へられたが、研究と指導を続けられること旧に変らない、戰爭地理學研究も亦今年モの上梓を見た。地質學教室中村、横山両教授、地理學教室小牧教授、廣島高師小野教授、三高藤田放授等發企して紀念事業を興すことゝなり、小川先生藏書目録の編纂が行はれることになつた。醵金の事は地質學教室、編纂は地理學教室が擔任して漸く六月に之が完成を見たことは御承知の所。尚會計決算は稍滞ることあつて未完であるが、とに角一應事業を果し得たことは偏に会員諸氏の御後援によるものであつた。

○石橋五郎先生　一両年来健康特に勝れさせられ、時に御上洛のこともあるが、十一月には御上京、在住会員は悉く集つて先生の御健康を祝したといふ。御同慶の極である。

○藤田元春教授　は本年二月四日華甲の壽を迎へられた。よつて談話會有志は下鴨晴部町蕉庵にてさゝやかながら祝賀の宴を張る所あつた。

○京大地理東京談話會は近年東京在住の會員が増加し来つゝめ定期的に集會を行ひ講演を行ふことに定め、本年五六月の頃発回を行ふた由。先述の如く十一月石橋先生御出京に際しては會員一同歓迎申上げた。尚会員の名を列ねると中野竹四郎、内田寛一、下田禮佐、大塚曽一郎、村松繁樹、太田喜久雄、塚本常雄、古澤三郎、内田秀雄、海老原治三郎、川上健三、安藤經一、大橋英男、御子柴幸一、村本連郎、淺井得一、神尾明正の諸氏。

○和田萬憲氏は今年四月より大學院學生として当教室に在籍されることになつたが、同氏は國際交通文化協会評議員、經濟史の專攻家である。こゝに紹介申上る。

會員名簿發行後の變更

――應召、轉任、住所変更等

勝田　圭通氏　轉任。御賜元離宮二條城所長

太田善久雄氏　兼務滿鉄東京支社調査室兼興亞院勤務。

山口平四郎氏　應召。

土田　英夫氏　所屬部隊名訂正。

須藤　賢氏　華北交通株式會社總裁室總務局に轉。

中森　増三氏

並河　由則氏　轉居。

下村　數馬氏　應召。

會員論著目錄

自昭和十四年一月　至十二月

小川琢治　戰爭地理學研究　古今書院刊　昭和十四年七月

聖戰第三年に入るに臨みて　地理教育　第二九卷　三六一―三六二頁

石橋五郎　國藝都市、新池田市（川崎健史共著）地理學　第七卷　一一八一―一一九三頁

寺田貞次	讃岐我拜師山発見銅鈴と善通寺町附近の上代文化		考古學雜誌	第二九卷	六九一―七〇二頁
中野竹四郎	両極地方の自然と住民 (一)	地理教育	第三〇卷	三九三―三九九頁
〃	(二)	〃	〃	一一〇〇―一一〇六頁
内田寛一	回教國の重大性	地理	第二卷	一〇四―一〇六頁
	時局と地理教育 (九)	地理教育	第二九卷	三九七―四〇四頁
〃	(一〇)	〃	〃	五一二―五一九頁
	日支連城聚落差別観	地理	第二卷	一八三―一九二頁
	興亜新地理教育の主眼点	地理教育	第三〇卷	二九―四三頁
	地理上より見たる支那塩の若干の問題	〃	〃	二四一―二四八頁
	北樺太より我が石油石炭権益について	地理	第二卷	三八一―三八三頁
	支那の石炭 (一)	地理教育	第三〇卷	四八一―四八八頁
	外南洋に於ける政米列強の覇霸	〃	〃	六〇一―六二一頁
	支那の石炭 (二)	〃	第三一卷	一三―二〇頁
〃	(三)	〃	〃	二六四―二七四頁
田中秀作	植民地理學の方法論に就いて	〃	第三〇卷	二四九―二五三頁

下田禮佐	蒙古族の今昔	〃	〃	〃	一〇八一―一〇九〇頁
藤田元春	漢書地理志通貫支國考	史林	第二四卷	六八三―七一〇頁	
伏見義夫	最古の日支貿易と其文化	外交時報	第九二卷	一五八―一七一頁	
	支那民族の再吟味 (一)	地理教育	第三一卷	一―七頁	
	(二) 〃	〃	〃	一五一―一五八頁	
村松榮樹	時局に鑑み地理教育を如何にすべきか	〃	第三〇卷	一四〇―一五一頁	
	北海道に於ける集團移民の村落型 (一)	〃	〃	三七五―三八〇頁	
	〃 (二)	〃	〃	五二三―五二七頁	
内田勳	曾文溪の流路の変動と聚落及耕地との関係	地理學	第七卷	二六七―二七五頁	
	台湾の氣候に就いて一言述べる	地理教育	第三〇卷	四四六―四四七頁	
島之夫	フイリッピン民屋地理	地理學	第七卷	四三二―四三七頁	
	シャム民屋地理	〃	〃	七七一―七七七頁	
	滿洲國の家屋	地理教育	第三〇卷	四三〇―四三二頁	
	ホロンバイルを覗く	地理春秋	第三卷	二一―二七頁	
瀧本貞一	都市の位置と港湾	地理學	第七卷	三八六―三九七頁	

増田忠雄	滿洲東部國境の諸問題	滿鉄調査月報	第一九卷	一〇九―一五七頁
三友國五郎	支那に於ける近代地理學の発達	地理教育	第三一卷	一四一―一五〇頁
内田秀雄	大同江下流の先史地理	史林	第二四卷	四一一―四三二頁
織田武雄	西川如見と其の地理學	史林	第二四卷	一三八―一六四頁
	交通の自然に及ぼす影響	地理學	第七卷	一二九―一三四頁
	支那の石炭	商學論究	第一七号	全四二頁
別枝篤彦	黄河水災に関する若干の資料 (一)	地理教育	第二九卷	五〇四―五一一頁
	〃 (二)	〃	〃	六五三―六六一頁
	ひとつの世界	地理學	第七卷	一〇六五―一〇六九頁
野澤 浩	時局と地理教育につきて	〃	〃	五一三―五二四頁
日下卓造	地域に於ける商戸率の意義	地理論叢	第一〇輯	一〇一―一三二頁
淡井得一	関東地方諸都市の人口増減に就いて	〃	〃	一―二三頁
川崎健史	園藝都市・新池田市(石橋五郎共著)	地理學	第七卷	一一八―一一九三頁
衣川芳太郎	「時局と地理教育」人文現象の理解認識	〃	〃	三六〇―三六一頁
	長門國見島に就て	地理論叢	第一〇輯	八三―九九頁

伊藤　博　天草諸島の人口　二五―八一頁
西村睦男　台北市の地理學的研究　一六九―二二二頁
下村敏馬　台湾北部の茶に就いて　一三三―一六八頁
淺井辰郎　内蒙古の水　地理學臨時増刊（第七巻第五号）一四四―一五〇頁
水原洛井辰郎　内蒙古の生物學的調査(四)、氣候と水(一)、　植物及動物　第七巻　全七頁
川上喜代四　ソ聯邦の極地航空路の開拓(一)(二)　地理學　第七巻　一八五二―一八五七頁
〃　〃　二〇一四―二〇一九頁

會計報告

前号報告以後左の諸氏より通信費の御寄贈に預つた。

昭和十三年十二月十九日　村上次男氏　金一円
〃　年十二月二十九日　和田俊二氏　〃
昭和十四年六月八日　岩根保重氏　〃
〃　年八月五日　中森増三氏　金二円
昭和十四年十月十九日　土田英夫氏　金一円

以上計六円。内土田氏は戰地より遥々御寄附被下つたものであつた。

次に本年二月一日現在高六十五円四十四錢以後の会計大要を報告して置きます。

繰越金　六十五円四十四錢

繰入	計	十一円三十錢
右内訳		七円三十錢　歓迎会餘剰
		四円　通信費（君鉄土田中藤）
小計		七十六円七十四錢
支出	計	四十円十六錢
右内訳		二十一円　談話会報VII印刷費
		七円八十錢　名簿印刷費
		十円九錢　通信発送費
		一円二十七錢　談話会大会支出
殘高		三十六円五十八錢（昭和十四年十二月六日現在）

右の如く一年の支出は大体四十円、今、明年へ三十六円五十八錢を繰越しますから明年はどうにか御奇附を仰がずに行けると思はれます。

昭和十四年十二月十二日印刷
昭和十四年十二月二十日発行　（非売品）

京都帝國大學文學部
地理學談話會
編輯兼発行者　代表者　小牧實繁

京都市左京區北白川東久保町
印刷者　佐藤東吉

京都市左京區丸太町東入
印刷所　甲文堂